

この事業は、公益財団法人東京都福祉保健財団「子供が輝く東京・応援事業」の助成を受けて、
2018～2020年度に実施、本誌を作成しました。



※無断転載・複製を禁ず。

発行日：2021年3月25日

発行者：特定非営利活動法人 芸術家と子どもたち

編集：金井 絵理 / デザイン：株式会社フォーリーブ / 写真：伊藤 華織 (P3、7、9、14を除く)

アートがつなぐ育ちの場

児童養護施設、こども食堂、ファミリーホームの交流ワークショップ 3年間の記録



2018-2020年度 子供が輝く東京・応援事業 記録冊子

特定非営利活動法人 芸術家と子どもたち

目次

はじめに 3P

プロジェクトについて

概要	5P
関わった場所や人たち	7P
ワークショップレポート 2018	9P
ワークショップレポート 2019	11P
ワークショップレポート 2020	15P

プロジェクトを振り返って

3年間の実績	19P
アーティストのこえ	21P
施設・団体のこえ	25P
コーディネーターのこえ	27P

芸術家と子どもたちについて

団体概要	28P
活動年表	29P
ご支援のお願い	30P



※このプロジェクトの座談会を、“芸術家と子どもたち”のWEBサイト上にコラムとして公開しています。

はじめに

二つの児童養護施設、こども食堂、ファミリーホーム、それぞれの場所に暮らしそこを居場所とする子どもたちが互いに交流し、音楽やダンス、演劇などを通じて一緒に何かをつくれたら、きっと楽しい時間になるのでは?との思いでこのプロジェクトを進めてきました。

子どもにとって生活する環境は大事ですし、過去の生いたち・経験も彼らに大きな影響を与えます。なかには、貧困や虐待など大人社会のひずみを受けて生きづらさを感じている子どもたちもいるかもしれない。でも、新しい仲間と出会って、一緒に時間と場所を共有して、自分を表現するとき、世界はきっと広がるはず。アーティストという“ちょっと変わった人”が「それ、いいよ。面白い。」とほめてくれて、どんどん自信もつくでしょう。

子どもたちがつながりあうのと並行して、異なる立場の大人たちも少しずつつながってきました。当NPOは児童養護施設にもう10年ぐらい通わせてもらっていますが、二つの施設が互いの場所を行き来するのは初めてでした。ファミリーホームやこども食堂とはまさに初めての取り組みでした。今後も、子どものそばにいる様々な大人たちが関係性を深め、ネットワークを広げていければと思います。

プロジェクト最後の1年間は新型コロナウイルスの影響を大きく受けました。思っていたような交流は進まず、みんなで集まる機会は限定的になってしまいました。でも、オンラインワークショップも導入しながら、いまやれることを探りながら進め、一定の成果を上げることができたと思います。各施設や団体関係者、そしてアーティストの皆さんにはプロジェクトの進行にあたって多大なご負担をかけました。ご協力に心より感謝申し上げます。

交流事業を継続し、地域の中で共に子どもを育てることの一助になれば、といま考えています。



特定非営利活動法人 芸術家と子どもたち

代表 堤 康彦



”芸術家と子どもたち”が目指す姿

児童養護施設を拠点に、定期的・継続的にアーティストによるワークショップを実施し、フラットでオープンな人間関係の中で子育てをする場をつくることを目的として3か年計画で始めました。児童養護施設の子どもたち、地域の里親家庭で暮らす子どもたち等が分け隔てなく交流し、文化活動を介して自己表現力やコミュニケーション能力、自己肯定感を高めること。そして、子どもたちやその家族が相互理解と交流を深めることで子どもの育ちを支援するという姿を目指しました。

児童養護施設に暮らす子どもたちにとっては、地域社会との接点を持ち、地域に知り合いや愛着を持つことで、自立後の精神的な支えや困難に直面した時の助けとなり得えます。地域の子どもたちにとっては、親以外の多様な大人、人との出会い・交わりの中で、自分の価値観をつくり出していくための育ちの場となります。里親等にとっても、子育ての喜びを周囲と共有し、元気を取り戻せる機会ともなり得ると考えました。

この取り組みは、新しい社会的養護の形を模索しながら、アートの力で子どもたちとその親や養育者を育て、励まし、また、施設を開き、地域の子育て力を底上げし、子どもが輝く、明るい未来の子育て環境をつくるチャレンジでした。

2018～2020年度実施概要

2018年度	拠点となる児童養護施設でのワークショップ実施
2019年度	清瀬市内2つの児童養護施設の交流ワークショップと発表会の実施 清瀬市内のこども食堂などでワークショップ実施
2020年度	児童養護施設、こども食堂等、ファミリーホームの交流ワークショッ プと発表会、座談会の実施。 3年間の記録冊子の発行

この事業は、公益財団法人東京都福祉保健財団「子供が輝く東京・応援事業」の助成を受けて実施しました。



関わった場所や人たち

児童養護施設とは

児童福祉法に定められた児童福祉施設です。
経済的な理由や虐待など様々な事情により保護者と一緒に生活することが難しい、概ね2～18歳までの子どもたちが暮らしています。
子どもたちの生活支援や心のケア、自立に向けた支援などを行っています。

こども食堂とは

子どもが一人でも行ける無料または低額の食堂です。「地域食堂」「みんな食堂」という名称のところもあります。
民間発の自主的・自発的な取組みで、2018年の調査(むすびえの前身団体「こども食堂安心・安全向上委員会」調べ)では、2,286か所あることが明らかとなり、2019年6月には、1年で1.6倍増え、すべての都道府県に少なくとも3,718か所あります。
(出典: NPO法人 全国こども食堂支援センター・むすびえ)

ファミリーホームとは

家庭環境を失ったこどもを里親や児童養護施設職員など経験豊かな養育者がその家庭に迎え入れて養育する「家庭養護」です。
事業という言葉がつきますが、あくまでも養育者の家庭の中で、5～6人のこどもを預かり、こども同士の相互の交流を活かしながら、基本的な生活習慣を確立するとともに、豊かな人間性及び社会性を養い、将来自立した生活を営むために必要な知識及び経験を得ることに主要な目的があります。
(出典: 日本ファミリーホーム協議会)



アーティスト

「表現とコミュニケーションの専門家」である現代アーティスト。
彼らはユニークなものの見方、とらえ方をされていて、専門的な技術や能力を活かしながら、いまの世界を作品に表現しています。
”芸術家と子どもたち”のワークショップの講師を務めるのは、さまざまな分野で注目されている個性的なアーティストたちです。
公演や展覧会など特定の場にとらわれない、社会との新しい関わりを探るアーティストたちが、学校や各施設などと連携して子どもたちと交流を深めながらワークショップの場をつくっています。



NPO法人 芸術家と子どもたち

1999年に発足、2001年からNPO法人として活動を行っています。
私たちが取り組んでいるのは、現代アーティストと、いまの子どもたちが出会う「場づくり」です。
職員や養育者の方、施設のニーズ、対象となる子どもや地域の特性に合わせて厳選したアーティストをコーディネート。
先生・職員や子どもたちとアーティストのかけ橋となり、
ワークショップが双方にとってより豊かな体験となるようワークショップをサポートしています。

ワークショップレポート2018

児童養護施設でのプレワークショップ

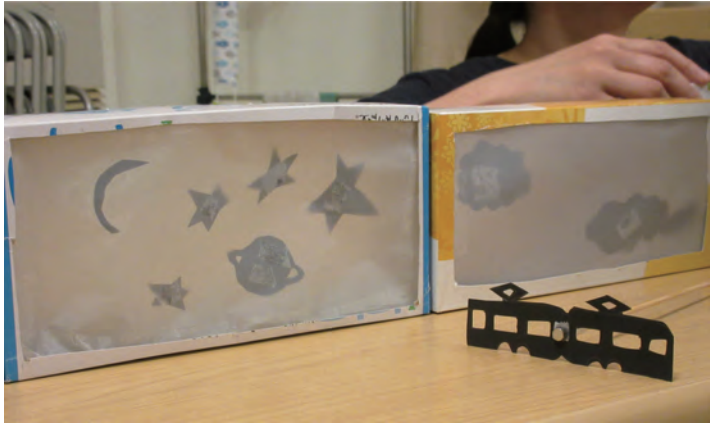
2018年度は児童養護施設「子供の家」と連携してワークショップを開始。次年度以降の交流も見据えて、子どもたちが交流しやすいワークショップをそれぞれの立場で検討し、実施しました。

初めての出会い



子どもたちと初めての出会いは、お互いの名前をリズムに乗せて呼び合うことからスタートしました。その後、ハンカチ落としや、紙風船を使った遊びを通して子どもたちの心と身体をほぐしていきました。また、ステージに大きな布を用意して、身体でいろんな形の影をつくって遊びました。

影絵づくり

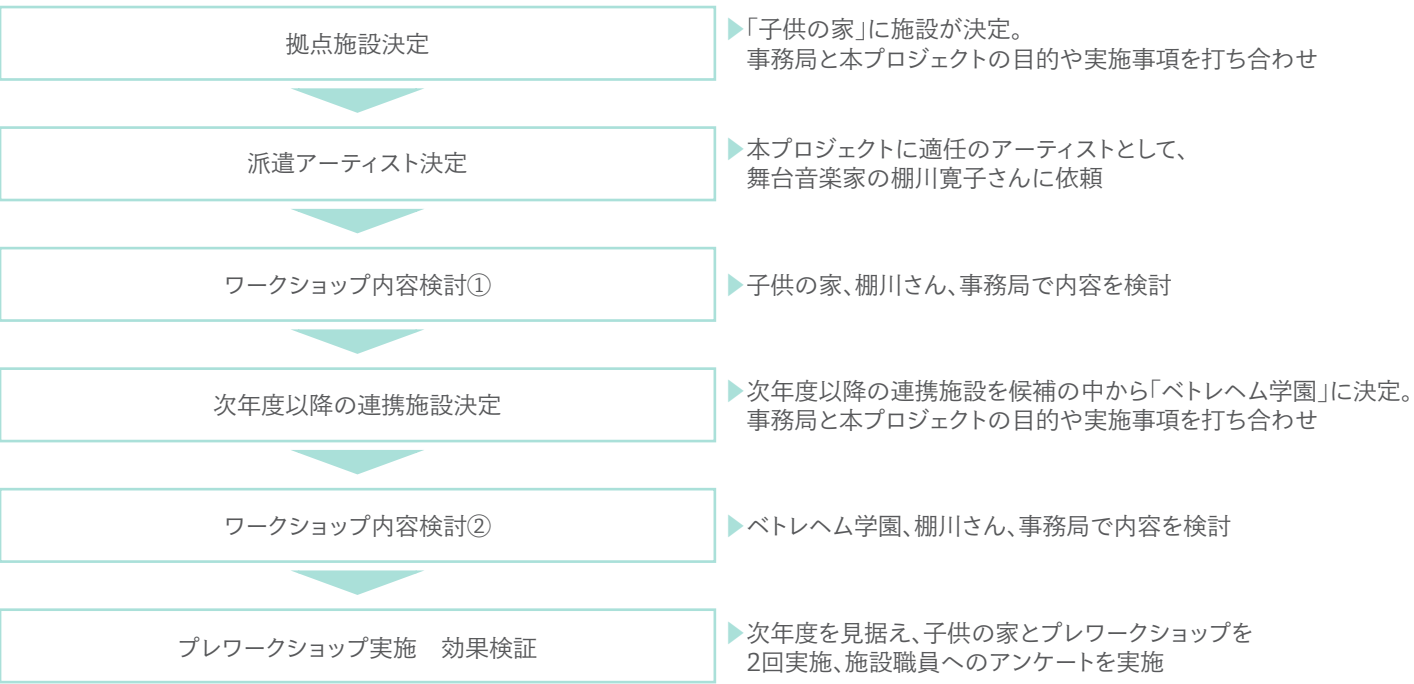


ティッシュの空き箱で簡易なスクリーンをつくり、黒い画用紙で好きな形を切り貼りして影絵をつくりました。ものづくりを通して、協力してもらったり教えてあげたり、子ども同士や、子どもとアーティストの関係性が自然と深まっていきました。最後には、一人ひとりがつくった影をつなげて人形を動かしながら遊びました。

職員のこえ

当施設だけでも、本園とグループホームに建物も分かれているので、普段関わりの少ない子どもたちも皆で遊ぶ良い機会になりました。職員にとっても、自分の担当ではない他棟の子どもと関われるため、子どもたちの意外な一面を見ることができました(子供の家 職員)

2018年度の取り組み



ワークショップレポート2019

2つの児童養護施設の交流・地域の多様な背景を持つ子どもたちとのワークショップ

2019年度は2つの児童養護施設の子どもたちが交流するという初めての試み。一緒に音楽や劇をつくり関係性を深めることを目的としました。最後には「発表公演」として活動の成果を見せる機会を設け、子どもたちに一つの作品をつくり上げる経験をしてもらうことにも挑戦しました。

交流ワークショップ

ワークショップ風景



初めての交流ワークショップでは、提灯づくりを中心に取り組みました。道具を交換したり、お互いのつくっているものを見て刺激を受けたり、違う施設の職員さんやアーティストに手伝ってもらったり、自然と人と人とのつながりが生まれるようにしました。一つの物語をつくる、という場所と時間を共有することから関わり合いが生まれていきました。それぞれが成りたい役を考えたり、絵のカードを使って物語をつくったり、着たい衣装をつくったり、一人ひとりがやりたいこと、楽しいことを大切にしました。



物語は、子どもたちの意見を聞きながらつくっていきました。どんな登場人物で、どんな恰好で、何をしたいのかを想像し、それを元にアーティストが台本をつくりました。物語の流れができたら、セリフをアレンジしたり、毎回言うことが変わっても構いません。子どもたちから出てくる動きや言葉を丁寧に拾い上げて物語になっていきました。衣装づくりも子どもたちがしました。ダンスがしたい、カッコいい衣装が着たい。自分のやりたいことをしっかりと伝えられるようにもなり、みんなの願いが詰まった物語が出来上がっていきました。

発表公演

『空の向こうの天の城』という劇が完成、最終日は、両施設のみなさんに向けて発表しました。

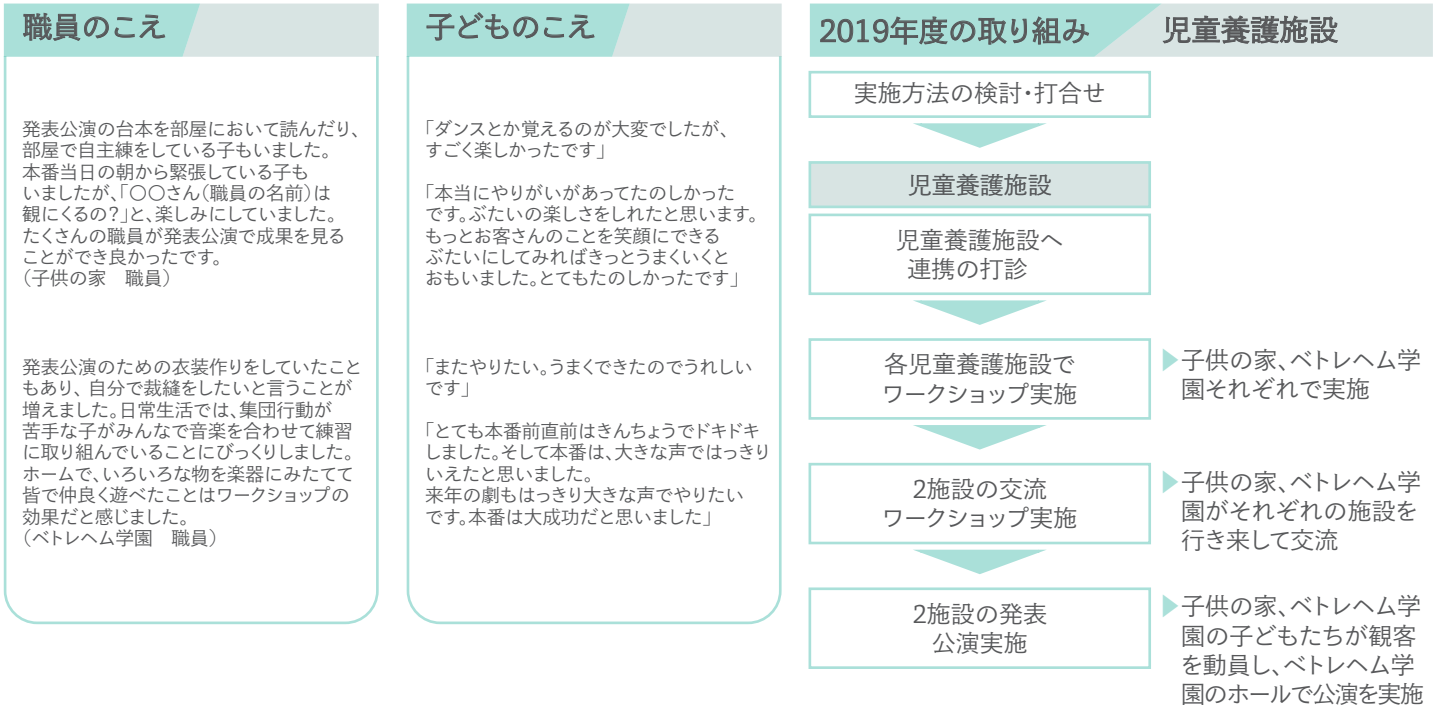
ワークショップでは、人前に立つことを恥ずかしがったり、気分が乗らず違うことをしていたり、いろんなことがありましたが、

発表公演ではアドリブを入れたり、堂々と踊ったり、一人ひとりの成長が見られました。

職員さんと自主練習をした子どもがいたり、みんながワークショップを楽しみにしてくれていました。最後には盛大な拍手をもらい、笑顔を見せてくれました。終わったあと、職員さんからたくさん褒めてもらったことも、喜びと自信につながっているようです。

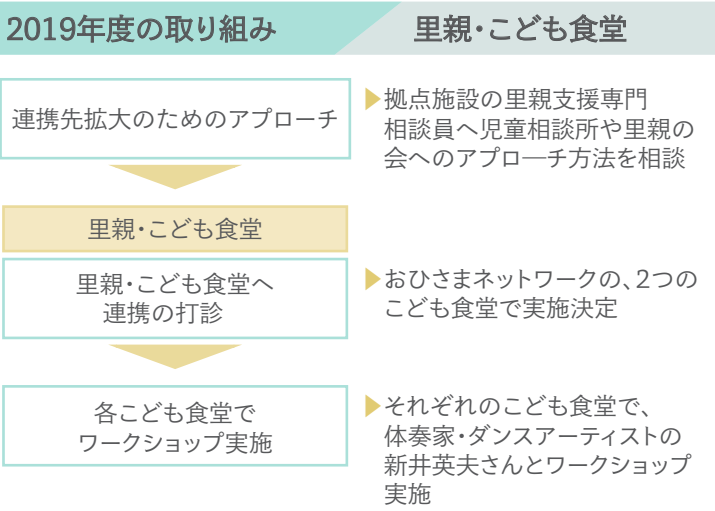


ワークショップレポート2019



こども食堂でのワークショップ風景

タイコや、木片、ボールなど身近な物も楽器にして、身体と音で子どもたちの表現を引き出していました。子どもたちがそれぞれ好きな楽器やモノを持って即興でセッションをしたり、木片を頭に乘せて落とさないように動いたり、転がしていたピンポン玉からも遊びが生まれます。何かを「させる」のではなく、ちょっとしたきっかけになるようなモノを用意して、その時その場で出会った子どもたちがやりたいと思ったこと、興味を持ったことからいろいろ試していました。



ワークショップレポート2020

交流ワークショップ(2つの児童養護施設)



ワークショップ風景

子どもたちがアイデアを出しやすいように、4つのグループに分けて、それぞれ「陸の生き物」「海の生き物」「海賊」「建物」をテーマに、衣装や美術を考えてから、物語をつくっていききました。

つくった衣装や小道具を使って、グループをつなぐ短いお話ができていき、段々と一つの物語になっていきました。台本はつくらずに、身体を動かして即興でセリフを考えたり音楽を入れたりしながら、子どもたちのアイデアが少しずつ形になっていきました。

交流ワークショップ(こども食堂・ファミリーホーム)



ワークショップ風景

最初は、こども食堂とファミリーホームそれぞれの場所で、影を使った身体遊びなどから始めました。

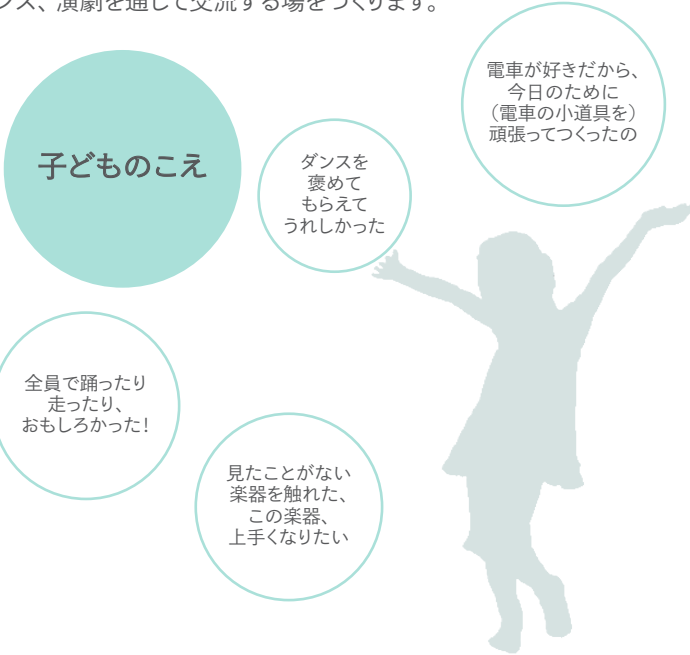
影に即興でお話をつけて、そこに即興で音楽をつけたりもしました。

その後、こども食堂とファミリーホームの交流ワークショップでは、子供の家(児童養護施設)の子も加わって、懐中電灯の軌跡を写真に撮る「光のダンス」や、オリジナルの楽曲をつくったり、身体を使ったいろいろなアプローチで子どもたちの表現を引き出しました。

ワークショップレポート2020

発表公演

最終日には、全ての場所の子どもたちが集まって、お互いに取り組んできたことを共有する場を設ける予定です。
ベトレヘム学園&子供の家でつくった、ギター兄弟が旅する物語をベースに、海の家族や蜂の兄弟、海賊などが登場し、そこに光のダンスや、身体を使ったパフォーマンス、オリジナル楽曲など、子どもたちとつくった要素を盛り込んで発表します。
子どもたち同士や関わる大人たちが、音楽やダンス、演劇を通して交流する場をつくります。



※新型コロナウイルス感染症拡大の影響により、冊子発行日より後に発表公演を行う予定となりました。

職員のこえ

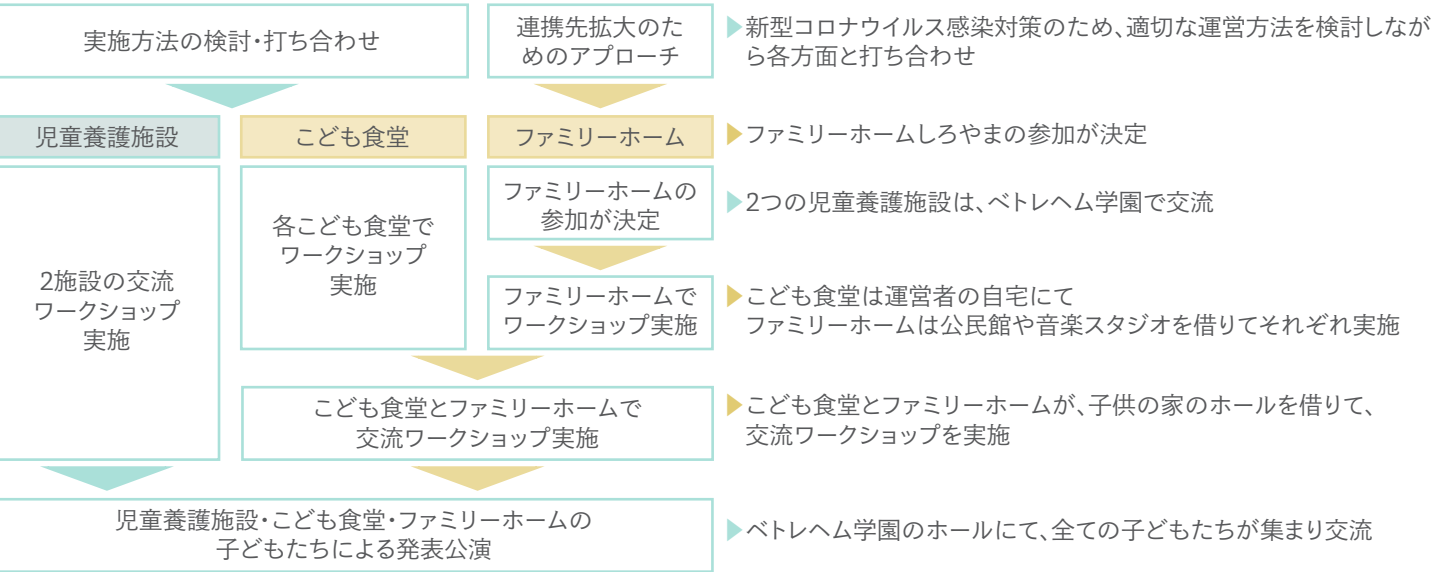
「最初は交流することにハードルがあった子ども、すっかり馴染んで、年下の子を気にかけてワークショップに取り組んでいました。他の子どもたちも、ワークショップでベトレヘム学園へ行くことが自然になっていきました。」
（子供の家 職員）

「ファミリーホームとしては初めての試みでしたが、以前、新井さんのワークショップに参加したことがある子がいて、ある程度の土台がありました。また、新井さんが子どもの好きなことや得意なことを活かす活動をしてくれたこともあり、新しく入所した子が入所してから楽しいことにワークショップを挙げたり、自信を持って発言できるようになりました。」
（ファミリーホーム 職員）

「このプロジェクト前は、ワークショップや外から人が来ることも初めてでした。内井慶な子や、自分が慣れない場所に対して怖いという気持ちの子もいました。でも交流をはじめてしまえば、遠慮なく伸び伸びと過ごすようになりました。1人でその場に行くのではなく、皆で参加することが良かったと思います。」
（ベトレヘム学園 職員）

「私たちのところでは、外部から人が来て、何かを観るというのは初めてでした。アーティストの新井さんは子どもたちの関心を引き付け、楽器を触るなど促してくれました。馴染んでいない場所や人が苦手な子どももいますが、いつもと違う場所のワークショップに参加したのは新井さんたちが来るから、という理由もあったようです。」
（こども食堂 運営）

2020年度の取り組み



プロジェクトを振り返って

3年間の実績

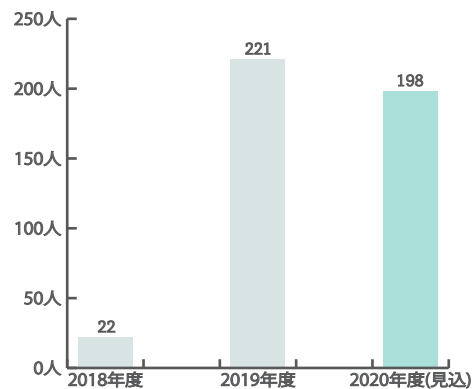
3年間で多くの子どもたちが新しい出会いと体験を得ることができました。

また、児童養護施設、こども食堂、ファミリーホームと様々な子どもの居場所との連携ができました。

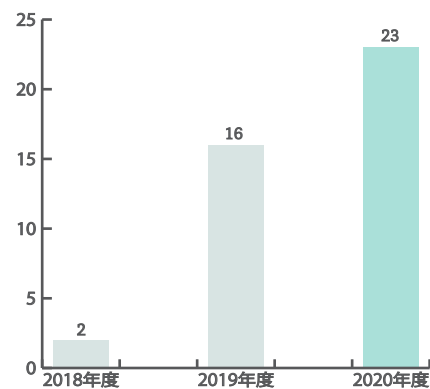
2020年度は新型コロナウイルスの感染拡大に伴い、一時対面で行うワークショップの実施が困難な時もありました。制限がある中でも、密にならない工夫やオンラインでの交流を試みるなど出来る限りの方法で交流を継続しました。

密を避けるため、参加した子どもの人数が少し減りましたが、その分、個々のコミュニケーションの時間が増え、子どもたちとアーティストの心の距離が近づくという効果も見られました。

参加した子どもの延べ人数



ワークショップ実施回数



参加施設など

2018年度

児童養護施設: 子供の家

2019年度

児童養護施設: 子供の家・ベトレヘム学園
こども食堂: おひさまネットワーク

2020年度

児童養護施設: 子供の家・ベトレヘム学園
こども食堂: おひさまネットワーク
ファミリーホーム: ファミリーホームしろやま

※冊子制作時プロジェクト完了前のため、2020年度は見込み数値です



アーティストのこえ

この経験がこれからの支えに

このプロジェクトを始める前、「これから関わる子どもたちは深いところで傷を抱えているのかな、どう関われば良いだろう」と心配をしていました。
でも、一緒にワークショップを始めてみると心配は不要でした。
子どもたちは一緒に1つのものを作り、アイデアを出し合い、
ケンカをしても折り合いをつけながら参加していました。

演劇作品を作るとき、子どもたちにアイデアを出してもらいます。
そうすると好きなアニメやテレビから連想したことが出てきがちです。
そこに、カードなどを使って話を組み立てたり、セリフを作るゲームをしたり
子どもたちは手段を知らないだけで、少し伝えれば工夫する能力があります。

作品作りを体験した子はやり方が分かってきて、人と作る楽しさや、
ひとりではない実感を得てくれていると感じます。

様々なワークショップにより新しい発見や体験を得て、
「楽しかった」「またやりたい」など感想を持つと思います。
この経験はそれだけではなく貯金になると思います。

「私の意見をみんなが聞いてくれた」「こんな役割を任せてもらえた」
「あの時に会った人にこう言ってもらえた」など、後で思い出して心の支えにもなるでしょう。

そして私のように、好きなこと・できることを仕事にしている大人がいると知ってもらうことは、
子どもたちにとって意味があるのではないかと思います。



棚川寛子(たなかわ ひろこ)

舞台音楽家。
演劇作品の音楽を作曲し、
俳優への演奏指導と併せて行うスタイルで活動している。
2003年、宮城聴演出ク・ナウカシアターカンパニーの
『マハーバーラタ』で朝日舞台芸術賞を受賞。
2014年には同作品がフランス、
アヴィニョン演劇祭に正式招聘。
正規の音楽教育を受けずに活躍する、
アウトサイダーアーティストとも言える稀有な存在



アシスタント：加藤 幸夫（俳優）



アシスタント：佐藤 円（俳優）



アシスタント：井上貴子（俳優）

アーティストのこえ



新井英夫(あらい ひでお)

体奏家・ダンスアーティスト。
自然から学び、余分な力を抜く身体メソッド「野口体操」を創始者野口三千三氏から学び、深い影響を受ける。
演劇活動を経てダンスへ。
国内外での舞台公演活動と共に、その両輪として乳幼児から高齢者まで幅広い対象に向けたバリアフリーな身体表現ワークショップを「ほぐす・つながる・つくる」をテーマに、福祉・教育・社会包摂に関わる場で展開している。
国立音楽大学・立教大学非常勤講師。

表現を通して「生き方」の幅を広げる

芸術の原点は、誰もがもつ心のモヤモヤ、得体のしれないエネルギー、未来への希望…。それらを表現したダンスや演劇には、オトナも子どもも、上も下もないと思っています。
ワークショップで、ある子が新聞紙を使って即興ダンスを披露してくれました。
それは唯一無比の踊りでした。

また別の子は小道具工作で「罨」を作りたい!と突飛なアイディアを出して、それが不思議な舞台シーンに発展しました。

僕は、自由な表現を認め合えるこの活動は世の中に必要なことだ!と思っています。
でも、現場では実はそんなことは忘れ、子どもたちの発想に驚き感心し、一緒に楽しんでいます。

スポーツを通して子どもたちは仲良くなることがあります。運動や勝ち負けが苦手な子もいます。

一方、ここでのワークショップは得意なことや好きなことから始められる。

ルールも自由につくれるし、勝ち負けありません。

でも「得意なこと、好きなことは何?」と子どもたちに訊くと流行りのマンガや音楽に偏りがちです。

子どもたちの暮らす状況によっては触れられる情報が限られるからでしょう。

子どもたちを尊重しながらも、僕の持つ音楽やダンスの蓄積や方法を伝えて、経験や表現の幅を広げる手伝いができればと。

活動を通じ、無理に全員が仲良くなる必要はないとも思っています。

自分の子ども時代を振り返っても、クラス全員と仲が良かったわけではないですから(笑)。

一緒に踊ったり、演じたり、歌ったりする中で気の合う仲間たちと出会い、

自由に自分らしく生きる練習をする場になれば良いなと思っています。



アシスタント：はしむかい ゆうき (演奏家)



アシスタント：板坂 記代子 (ダンサー・てきとうしごとと工房)

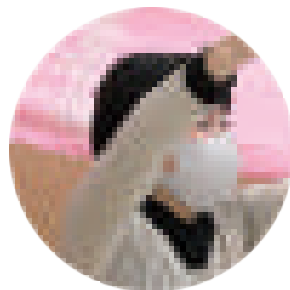
施設・団体のこえ

このプロジェクトには、ファミリーホームらしさを活かした参加の仕方が出来ました。

ある姉妹が、ファミリーホームとその他の場所で離れて暮らしているのですが月1回のワークショップで交流する機会が持てました。

家族の交流を促す対応ができたのは、柔軟性が高いファミリーホームだからこそであったと思います。この例以外にも、自身の創作意欲や特技を活かせる場になっており、児童自身がワークショップに対して臨む姿勢が変化したように感じます。その変化を職員も受け止めており、さらに良い活動になるように児童への連絡や事前準備などに努めています。

ファミリーホームは法人型と個人型があります。個人で運営されているところが圧倒的に多くあります。以前個人型の交流会に参加したとき、芸術家と子どもたちの活動を一緒にやると楽しいだろうなと感じました。繋がりが、さらに活動を広げていきたいです。



ファミリーホームしろやま
ホーム職員

鈴木ひとみさん

施設以外の子どもや大人と交流する機会を得て、ダンス、お芝居、工作など楽しい時間を過ごすことが出来ました。自分の意見を言う、自信をもって発信する力がついたと感じます。ワークショップを通じて、脚本や舞台道具を手作りしたり、人前での発表を経験し、人を楽しませる喜びを知ることができました。

施設の中だけで人間関係が完結してしまう子ども多いのですが、このプロジェクトを機に、「施設にいる子ども」という肩書きをはずし、より地域で子どもたちが活動できるように、職員としても地域に目を向けられるよう話し合っていきたいと思います。

子どもたちの楽しむ様子や話を聞いて、今回関われなかった職員も様子を見に行きたかったとの声があったり、児童からもやってみたい、参加したかったとの意見がありました。今後このような機会がある際には、興味のある子が自由に参加できるように調整が課題としてあります。子どもたちはワークショップの心待ちにしており、それが励みとなり、生活のモチベーションにもつながっていました。



ベトレヘム学園
自立支援コーディネーター

金子祐子さん



子供の家
自立支援コーディネーター

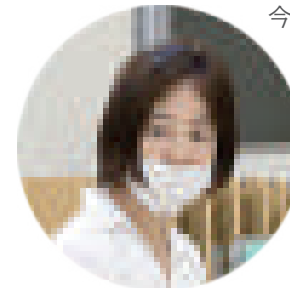
角能秀美さん

他施設の子どもと活動する、一緒に作品をつくるという機会そのものがめずらしく、良い体験になっていると思います。

学校や集団には適応が難しい子も、遊びを通じた活動なら参加しやすいと思いますし、自分に合った役割で参加できるよう促してくださるので良かったと感じます。職員としても、他施設や地域の子どもの様子を知れることは良い機会になります。

中には、自分が施設に入所していることを学校でオープンにしたいくない子もいるので、配慮は必要ですが、子どもたちが学校や地域の友達と誘い合ってこういった活動に参加できるようになるといいなと思います。

そのための土台として、まず子どもたちが友達と一緒に遊ぶとか、習い事やスポーツクラブなど施設外に出て行ける練習や自信をつけていく必要があるので、交流の機会を意図的に作る一方で、日ごろからの取り組みが大事だと改めて感じました。



おひさまネットワーク

福本麻紀さん

今回のプロジェクトでは、児童養護施設の子どもたちと地域の子どもの交流の機会が設けられた一方で、まだまだ外部からの働きがなければ、一緒に遊ぶという場を持たないのだと感じました。

地域社会で子どもを育てる意識を醸成するためには、会場は施設よりも地域、たとえばシルバー人材センターの集会所で行うなど試みても良いと思います。参加したワークショップや、様々な体験が影響して、不登校の小学生が、外遊びをできるようになりました。

子どもにワークショップへの参加を強制してはいませんが、参加しなくてはいけない雰囲気を感じました。この居場所は、来ても来なくてもよい場であり、ボランティアスタッフとの関係性や場の雰囲気だけで子どもを引き付けているあいまいな場所なので、やることが決まっているというものは馴染みにくさがありました。

フリースクールや学習支援、児童発達支援センターなど、一定の人数がいるところから、参加したい子どもを集めて実施すると、より効果や改善点が見えるのではと思います。

コーディネーターのこえ

プロジェクトを始める前は児童養護施設だけではなく、里親家庭や、こども食堂を利用する様々な子どもたちが交流するとどうなるか、あまり具体的なイメージは持っていませんでした。
ただ、これまでも一緒に活動をしてきた方々がいれば連携することは可能と思えまし、子どもたちとアーティストがいれば楽しい場所がつかれる、という期待の方が大きかったと思います。

最初から何もかもが上手く進んだわけではありませんが、ワークショップや発表の後に職員の方々のお話を聞くと、子どもたちは、ワークショップでアーティストに会えることを楽しみにしてくれていたようです。
自分の言葉や表現を否定せずに、どんなことでも受け止めてくれる大人、甘えられる大人がいることは子どもたちにとって大切なことなのだと思います。

子ども同士、必ずしもみんなが仲良くなる必要はないと思いますが、何かをつくるという時間を共にすることで、子どもたちは施設などの枠を超えて自然とお互いを認識し、関わりを持つようになっていきました。
自分は一人ではないということを知り、ゆるくいろんな人とつながった経験が、施設から旅立った後にも、社会から孤立せず人と関わりながら生きていくことにつながればと願います。

今年度で助成期間は終了しましたが、年度や助成期間に縛られず、どうすれば継続していくことができるのか、改善すべきは何かを考えています。
子どもたちの声や想いをしっかりと受け止めながら、柔軟に方向性や実施方法を見直し、関わる大人同士のコミュニケーションも促して、より良い関係性をつくり、こうした場づくりを続けていきたいと思っています。



芸術家と子どもたち事務局長
中西 麻友

芸術家と子どもたちについて

団体概要

NPO法人 芸術家と子どもたちは、1999年に発足、2001年からNPO法人として活動を行っています。
私たちが取り組んでいるのは、現代アーティストと、子どもたちが出会う「場づくり」です。
この出会いが、子どもたちにとって「潜在的な力を存分に発揮し伸ばす機会」、
アーティストにとって「子どもたちと関わり、新たな表現を探る機会」になると考え、主に3つの活動に取り組んでいます。

ASIAS(エイジアス)

ASIASは、Artist's Studio In A School の略で、アーティストが小学校等へ出かけていき、先生と協力しながらワークショップ型の授業を実施する活動です。2010年度からは、児童養護施設等で同様の取り組みを開始し、福祉分野でも自立支援につながる多様な体験を育むワークショップの可能性を開拓し、実践を積み重ねています。

パフォーマンススキップ・トーキョー

ダンスや演劇、音楽などの分野で活動するプロの現代アーティストを、都内の小中学校やホール・文化施設・児童養護施設等に派遣。10日間程度のワークショップを行い、子どもたちが主役の舞台作品をつくり上げます。最後に発表公演を行い、多くの方々にワークショップの成果を発信しています。

ぞうしがや こどもステーション

子育て中の親子・家族がいっしょに楽しめるあそびのスペース。子どもや親子を中心に地域の人々がアートを通して交流する場をつくれます。
世界中の歌をうたい、楽器をかなで、おどり、絵本にふれ、そしてお芝居まで、ワークショップやライブを気軽に楽しめる場をつくっています。
また、豊島区内各所への出張ワークショップも実施しています。

活動年表

年度	できごと ※ASIAS事業を中心に記載
1999	任意団体「APA芸術振興協会」の名称で活動開始
2000	公立小学校で初めてのASIAS授業実施
2001	「特定非営利活動法人 芸術家と子どもたち」設立 NPO法人化に伴い、団体名を改名
2004	公立中学校、幼稚園、保育園でのASIASがスタート
2005	公立小中学校で、特別支援学級でのASIASがスタート 豊島区「次世代文化の担い手」育成事業スタート(小中学校・幼稚園)
2007	豊島区「文化体験プログラム」事業スタート(保育園) 横浜市芸術文化教育プログラム推進事業スタート(小学校)
2008	港区「子どもふれあいアート」事業スタート(幼稚園、のちに保育園も) 東京都・東京都歴史文化財団との共同主催事業、「パフォーマンスキッズ・トーキョー」(学校・ホール)スタート
2010	児童養護施設でのASIASを開始。「パフォーマンスキッズ・トーキョー」事業として、以降継続実施。2013年度以降は他の事業枠を加えて実施。
2011	文部科学省「児童生徒のためのコミュニケーション能力の育成に資する芸術表現体験」事業スタート(小中学校、のちに特別支援学校も。のちに文化庁へ移管) 特別支援学級でのASIAS授業を、これまでよりも実施地域や実施校数を大幅に拡大
2015	特別支援学校でのASIASを「パフォーマンスキッズ・トーキョー」事業として開始。障害児入所施設でのASIASを開始
2019	こども食堂でのASIASをスタート
2020	ファミリーホーム、養育家庭とのASIASをスタート

ご支援のお願い

特定非営利活動法人[芸術家と子どもたち]は、
私たちの活動を理解し、協賛・助成・寄付といった形で支援していただける企業・財団・個人の方をお待ちしています。
ご関心をお持ちの方は、是非事務局までお問合せください。



<https://www.children-art.net/support/donation/>

特定非営利活動法人 芸術家と子どもたち事務局

〒171-0031 東京都豊島区目白5-24-12 旧真和中学校4階
TEL: 03-5906-5705 FAX: 03-5906-5706
mail: mail@children-art.net
HP: <https://www.children-art.net/>